
Ever Lasting

沙也

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

E v e r L a s t i n g

【Nコード】

N 7 1 3 8 D

【作者名】

沙也

【あらすじ】

1ヶ月後、彼はこの世から消されてしまう。その彼に下された最後の指令とは ？ 思いがけない再会が、日本で待っていた。

第一章

「内密に処分するのが適当だろう」

俺は、世間のあずかり知らぬところで存在を消されようとしている、らしい。

だからといって、俺を取り囲んでいる連中の顔が鬼や悪魔に見えたり、自分の運の悪さに腹を立てたりはしなかった。彼らもまっとうな判断を下しただろうし、これが自然な成り行きだと思う。

まあ自分でもそれなりのことをやった自覚はあるわけで。それで消される　つまり殺されることに、別に後悔はない。俺がこの世に存在していたらまずい、ということもよく分かる。

どうせなら執行は早い方がいい。生への執着が強まることを恐れてはいないが、近いうちに死んでしまおうと分かっているなら、何もせず大人しくしていることに何の意味もないと思うだけだ。

22年の人生も、悪くはなかっただろう。そんなことを考えていた。

3日後、面会した同僚が唐突に言った。

「処分が1ヶ月前倒しになった」

言葉の意味を理解するのに、たいして時間はかからなかった。

「外部からの圧力か」

「さすが、鋭いね。長官に直接掛け合ってきたらしい」

「誰の指図だ？ 俺はそんなこと望んでない」

「それは言えない。ただ、君には想像以上に強力なバックがついて
いるってことだ」

「いや、大体想像はつく。それで？ 上がいくら前倒しを承諾
しても、ただで、というわけにはいかないんだろ？」

”処分”まで日があるのは面倒だが、決まってしまったものは仕
方ない。今更厄介ごとのひとつやふたつに巻き込まれることは、苦
でもなかった。

「察しがいいな。実は…」

冬の寒さも薄れ、すぐ側までやって来ている春を待つばかりにな
ったころ。

きりしまゆつや
桐島優也は城北医科大学のウイルス学研究室を訪れていた。

「教授、頼みます！ 俺に単位ください！ 一生のお願いです」

先ほどから、研究室長の岩崎教授に30分近く頭を下げ続けてい
る。

「さつきからしつけない。一回『F』がついちまったもんは仕方が
ねえだろう」

「だからそこを何とか！ この2単位がないと進級できないんです
ってば」

「そんなのはお前の責任だろうが。俺は評価を誤ったつもりはねえ

ぞ」

「だとしても、何か救済の余地くらいないんですか？ レポートでも出しますから」

「そもそもお前があんな根拠のねえレポート書くから、俺は『F』をつけたんだ！」

とりとめのないやりとりが延々と続いており、研究室の人間は呆れた色を隠せない。後期成績発表のこの時期、似たような状況は幾度となく目にしてきた彼らではあったが、ここまで粘った学生は彼が初めてだった。

「俺もう4年ですよ。ここでダブってらんないですよ」

「いや、お前には十分その価値があると思うぞ。いっぺん脳ミソ入れ替えて、来年俺を唸らせるレポートを仕上げてから、またここに来い。その時はちょっと考えてやる」

「それ意味ないっすよ、教授……」

優也が肩を落としたところへ、「教授、お客さんですよ」と研究室の院生が来客を告げた。

「おう、分かった。じゃ、残念だったな、桐島」

このままでは話をはぐらかされる、と危機感を抱いた優也は、「待あーった！」と叫んで、立ち上がった岩崎の行く手を阻んだ。いわゆる通せんぼだ。

「単位、ください。本気で」

「あのなあ……」

呆れかえった様子の岩崎が片手で顔を覆う。大概しつこいと自分

でも思うが、何としてもここで単位を取得しなければならぬ理由が優也にはあった。優也が真剣な表情で岩崎に訴えかけていると、

「取り込み中なら、後で出直しましょうか」

背後から男の声がした。客が来ている、つまりアカの他人に自分の醜態を見られているということのを忘れていた優也は、急に恥ずかしくなって、慌ててそちらを振り返った。

「すみません、もう終わるんで」

そこに立っていた男の姿を見て、優也は一瞬固まった。記憶が間違っていなければ、彼は。急激に懐かしさが胸にこみ上げてくる。

「お前……景助^{けいすけ}か？ アメリカ……日本人学校で一緒だった……」
「久しぶり。まさかこんなところで会うとはね」

そう言って、橘景助は穏やかに笑った。

優也と景助は、7歳から15歳までの9年間を同じアメリカの日本人学校で過ごした。優也が父親の転勤でアメリカに移り、その家の近所に景助が住んでいたのだ。もともと日本人の少ない地域で、二人はお互いに絶好の遊び相手だった。優也の高校進学と父親の再びの転勤が重なり、日本に戻ってきたのだが、なぜかその後アメリカの景助とは連絡が取れなくなってしまったのだ。7年ぶりの再会ということになる。

「しかしお前変わったな。えれーいい男になって…背もだいぶ伸びたよな？」

「優也は相変わらずだな。後ろ姿を見た時はまさかと思ったけど」
「あんなところ見られたなんて…まあそれよりさ、おばさん元気か？もう7年もたつわけだろ」

二人が 特に優也がはしゃいで言葉を交わしていると、

「おい、桐島。ダチとの再会を喜ぶのはいいけどな、橘君は俺に用事があつて来たんだよ。お前の用は済んだだろ？ さつさと帰れ」

惘然とした岩崎が口を挟んだ。そういえばここが研究室であることも、岩崎の存在も忘れて話し込んでいた。しまったと思いつつ、肝心なことを流されてはまずい。

「済んでませんよ。単位くれるまで、俺は帰りません。 悪いな、景助。進級かかってるからさ」

「俺は構わないけど。岩崎先生、どうなさるんですか」

景助が面白そうに言う。何の用事があつてここに来たのかは知らないが、景助を味方につければそれなりの効果はありそうだった。

「どうもこうも…橘君、こいつのレポートを読んでやってくれるか。俺がこいつに単位をやりたくない気持ちがよく分かるはずだ」

頭を掻きながら、岩崎がデスク上にあつたレポートを景助に手渡した。

岩崎に酷評されているが、このレポートは優也が時間がないなかでも 提出締切日前日に、一夜漬けで 自信を持って仕上げたものだった。確かに研究の論証は曖昧で、結論に至るまでの過程が

整然としていないことは認めるが、なにも『F』評価をつけるほどのことはない、というのが優也の主張だ。

レポートに目を通しながら、景助は興味深いといった表情をしている。

「てか景助、それ読んで分かんのか？　もしかして、お前も医学部進んだのか。そっぴやアメリカにいたころも、得意科目は同じだったもんなあ」

優也が暢気なことを口走ると、岩崎が鬼のような形相に変わり、その場にあつた雑誌を丸めて思いきり頭を叩かれた。

「痛つてえー！　何するんすか、いきなり！」

事情が分からないままに叩かれた頭をおさえる優也に、岩崎は吐き出すように言った。

「いつそお前は1年生からやり直せ。お前がいかに勉強してないかが分かった」

「はあ？　そりゃ勉強不足に関しては反論できないですけど…」

首を捻る優也に、景助がレポートを差し出した。

「このレポート、半年前のネイチャー誌の論文を参考にした？」

「ああ、まあ…」

「だったらこの結論はおかしいな。俺が3ヶ月前のネイチャーで新説を提唱したから」

「は？」

「読まなかった？　俺の学位論文」

完全に思考が停止してしまった優也に、岩崎がため息まじりに説明する。

「橘君はスタンフォード大学からの客員研究メンバーだ。ちなみにコロナビア大学を卒業して、現在は医学修士号をお持ちだ。進級がかかった2単位にすぎてるお前とは次元が違う」

優也は思わず景助を振り返った。はにかんだように笑う景助は、7年前までの、優也がよく知る景助とは遠くかけ離れた存在に思えた。

第二章

久しぶりに訪れる東京は、住み馴れたカリフォルニアの気候より肌寒く感じられた。機内から一步外へ踏み出した瞬間、アメリカとは異なる空気に違和感を覚えた。自分は生粋の日本人なのに、と景助はもはや己の属する場所がどこにもないことを妙に納得した。

自分が研究員として派遣される先の城北医科大学の岩崎教授は、アメリカの大学での研究実績があり、同じくアメリカで若くして学会に名を知らしめた景助を快く迎え入れてくれるだろうとのことだった。どんな人物であろうかと思いをめぐらせていたところ、彼より先に幼馴染と予想外の再会をはたすことになった。

「見苦しいものを見せて、申し訳なかった」

安心していた優也を研究室の外へつまみ出した岩崎は、ばつが悪そうにして景助に応接用ソファを勧めた。

「いえ、彼とはよく知った仲ですから。会えてよかったですよ」

「ああいう学生が、毎年一人は必ずいるんだ。ただの馬鹿じゃませられねえから、こっちも困るんだ」

「でしょうね。彼もあの論文に疑問を抱いたからこそ、あんな曖昧でおかしな結論になったんでしょう。内容を理解していないのなら、あそこまでは書けないだろうし」

「マグレじゃねえかと思うよ、時々」

岩崎は癖なのか、よく頭を掻く。

「で？ スタンフォードから客員研究メンバーの紹介があった時は驚いたが、君は俺たちの研究をどこで聞きつけたんだ？ 米軍の情

報網はまだまだ侮れねえってか」

挑戦的な岩崎に、景助は無表情を貫いて応える。

「俺が米軍のスパイだとしても？」

「そんなことは言ってねえよ。ただ君が特定のウイルスのワクチン開発に関して、米軍から資金援助を受けていたってことが引っかけ」

「ご存知でしたか」

「俺も用心深いタチなんでね。素性の知れねえ人間を懐には入れらんねえんだ」

「確かに岩崎先生が1年前まで米軍の協賛プロジェクトのメンバーで、その研究を日本に持ち帰って続けている、ということは軍の情報で耳にしました。けどそのことと、俺が今回来日したことには何の関係もありません。単なる俺個人の興味です」

景助はごく真顔で言葉を綴る。お互い、腹の探り合いが続いたが、

「へえ…ま、どっちにせよ俺は受け入れ許可を出しちまったわけだし。ここで君を追い返しても大学のメンツに関わるしな」

岩崎がにやりと笑って、白衣のポケットから取り出したIDカードを机に置いた。

「君の頭脳を貸してやってくれ。これから頼むぞ、橘君」

幸い、彼はなかなか話の分かる人物であった。

コロナビア大学を卒業してる？

医学修士号？

てかスタンフォードってどこだ！？ それってすごいのか！？

ウイルス学研究室の入り口前に座り込んだ優也の頭の中で、疑問がぐるぐると渦を巻いていた。とりあえず、景助がすでに大学を卒業して、修士号まで持っているというからには、自分より遥かに出来がいいことくらいは分かる。コロナビア大学が、アメリカの名門校であることも知っている。ただあまりに縁がない世界なので、具体的なことはほとんど想像がつかないのだ。

まるで景助が雲の上の存在であるかのような。

「マジかよ、景助……」

優也が顔を覆って天井を仰ぐと、

「あの、すいません……そこ、どいてもらえませんか」

上から声がした。手をどけて見ると、女子高生が困った顔をして立ち尽くしていた。思えば優也は研究室のドアの前を堂々と占領し、人が通ることはかなわなかった。

「あ、すみません。すぐどくから……」

標準から考えても可愛い顔をした彼女に頭を下げつつ、優也がゆっくりと立ち上がったところへ、背後でいきなり開いたドアがぶつかってきた。１メートルほど弾かれた優也が恨みがましく睨んだ先には、岩崎と景助が立っていた。

「なんだ、お前まだいたのか」

岩崎の言葉にむつとしながらも、優也はぐつとこらえて「悪いですか」と一言呟いた。

「別に悪かねえが　　おお薫。来てたなら早く言え」

岩崎の関心は、すぐに少女に移ったようだ。

「今来たばかりだよ。この大学広いから、迷子になりかけた」

「そうか、わざわざすまねえな」

「いいよ、お父さんの研究室、一回見てみたかったし」

こんな可愛い子が岩崎教授の娘ってのは何かの冗談か、と優也が突っ込みそうになった時、

「それじゃ、岩崎先生。また明日からお願いします」

景助が横をすり抜けて歩いていつてしまった。岩崎に単位の話で喰らいつきたかったが、この状況ではどうにも無理そうであるし、景助が待っていてくれる様子もない。優也は仕方なしに岩崎に挨拶をし、どんだん先に行ってしまう景助の後を追った。

研究棟の廊下の角を曲がって、あと少しで追いつけるというところで、優也は足を止めた。

見知らぬ長身の男が景助の後ろについて歩いていた。さっきまではあんな男はいなかったはずだ。何やら英語で話しており、優也にとって聞き取るのに苦労はないが、随分と早口だ。

『上手くいきそうですか』

『どうだろうな。岩崎教授はなかなか手強そうな相手だよ』

『時間はまだありますから。くれぐれも頼みます』

そこまで言つて、男が不意に立ち止まった。ややあつて、こちらを振り返る。優也と正面から目が合った。

まだ若い東洋人らしいが、精悍な顔つきは日本人らしからぬものだ。こういった顔をしているのは、どの国でも大概は

「どうした、イチノセ少尉」

遅れて景助も顔をこちらに向けた。

「彼は？」

イチノセと呼ばれた男が、鋭い目つきで優也を見据える。

「俺の知り合いだ。変に警戒するな」

「しかし」

「いいんだよ。優也、もう岩崎先生と話は済んだのか。単位、もらえそうか？」

イチノセと話していた時の険しい表情から一変、景助が柔かな笑みを交えて優也に声をかけた。景助が、別人のように思えてならなかった優也は、イチノセの目線が気になりつつも、ほっとして首を横に振った。

「いや。今日はもう諦めた。あの教授、ちつとも落ちねえの。また明日あたり、手段を変えて頼み込んでみる」

優也が手のひらを返してみせると、景助は面白そうに目を細めた。そして、イチノセを顎で指し、

「彼はイチノセ少尉。特例で、米軍から俺のボディガード役で派遣されてきてる。やたらまわりを警戒してるけど、気にしないでくれ。これも仕事のうちなんだ」

「はあ……」

優也が畏まって小さく会釈すると、イチノセが英語で尋ねた。

「Mr・橘、彼は何という……?」

「桐島優也。俺の日本人学校での友人だ。だから英語で話しても、全部聞き取られてる。油断して内緒話をしないことだな」

そう言つて、景助が不敵に笑った。何やら二人の間に、えもいわれぬ空気が漂っている。

優也は若干びくつきながら、

「へ、へえ……ボディガードとか、すごいな。そんな、狙われるような立場なのかよ?」

「どうだろうな。見張りつて言つた方が正しいかな」

「Mr・橘」

景助が口元を歪めると、イチノセがその肩を掴んで言葉を止めさせた。

何だか、とてもそよそしい。彼らは他人に知られてはいけない何かを抱えている。優也はそう感じた。

「そうだ、景助。お前どこ泊まるんだよ? まさかずっとホテル暮らしすんのか」

何とか『普通の』景助に戻ってほしくて、優也は話題を変えた。

「とりあえず大学に近いマンションを借りることになってるけど…今日はホテルかな」

景助の言葉に、イチノセが頷く。

「だったら今晚、ウチに来いよ！俺の実家、こつから電車で二駅なんだけどさ。親父もお袋も懐かしがるだろうし！汚いけど、部屋はちゃんとあるから」

優也の提案に、景助は少々面食らった様子だった。

「いや、でも…」

「心配いらねえって！イチノセさんにもちゃんと泊まってもらえるし…お前さえよければ、さ？景助」

あまり強引なことは言えないし、記憶では景助は下手に出られると弱かったはずだ。優也はイチノセの顔色も窺ってみるが、彼は一生かかってもうんと言ってくれそうになかった。

「俺は別に…優也が迷惑じゃなければ」

「Mr. 橘！」

「いいだろ。今日だけだ」

景助が言い放つと、イチノセは渋い顔でため息をついた。ボディガードも苦勞が多そうだと優也はほんの少し同情した。

第三章

「ほんと懐かしいわね。景助君、随分かつこよくなつて…」

夕食時、ミ―ハーな声を上げているのは、優也の母である。優也が景助を連れて帰宅すると、大慌てで家中の掃除を始め、あげく桐島家では年に一度もない寿司の出前を取った。

今年小学校5年生に上がる妹までもそわそわしており、優也は気恥ずかしくてならなかった。けれど、ちらりと隣に座って寿司を頬張る景助の横顔を見た優也は、仕方ないかと納得した。

昔から可愛い顔をしていたのは確かだ。あの頃から優也の母親は景助のファンだった。7年たった今は、長身で、誰が見ても端正な顔立ちの美青年へと成長している。

（こりや明日から岩崎教授の研究室も大変だな　　）

「そついえば景助君、お母様はお元気？　連絡もずっと取っていないかったし…」

優也がどうでもいいことを考えているうちに、母親がどんどん話を進めていく。彼女を景助の正面に座らせたのは間違いだった、と優也は後悔した。母親の口は永遠に閉じそうにない。

「名前はそつ…涼子さん！　まだアメリカにいらつしやる？」

「いえ。父と母は6年前に離婚したんです。だから母は今、日本にいますよ」

（地雷踏んでんじゃねえよ、お袋　　）

「あ…ごめんなさい」

「気にしないでください。もう6年も前のことですから」

景助が平然として言った。

「そ、今日はまあ楽しもうや。ほら、飲め景助」

優也は半ば無理矢理に場を盛り上げようと、景助のグラスになみなみとビールを注いだ。

夕食にきりがつき、それぞれが部屋に籠ったり、テレビを見たりするようになった頃。

「こんなところにいたんですか」

桐島家から少し離れたコンビニの前で煙草を吸う景助に、イチノセが声をかけた。

「別に逃げちゃいないだろ。俺だって、一人で煙草が吸いたい時ぐらいあるんだ」

「分かってます。桐島さんが心配そうにしましたよ。貴方が気分を悪くしたのではないかと」

「あいつは いつもまわりに気を遣う奴だったから」

景助はゆっくり紫煙を吐き出した。

「彼は貴方に再会できたことを、とても喜んでいる」

「それは俺も同じだ。だからって、ずっと一緒にはいられないだろ。」

…あと1ヶ月したら、俺は帰国しないといけないんだ」

「彼は悲しむでしょうね」

「仕方ない。今更どうにもならないことだ」

景助は灰皿に短くなった煙草を落とし、コンビニの前を離れて桐島家に帰ろうとした途中で、ぴくりと動きを止めた。イチノセも何かに反応したように、身を構える。

「俺が来日するのは、極秘事項じゃなかったのか」

景助が小声でイチノセに尋ねる。周囲の気配に意識を集中させることは忘れない。

「もちろん極秘ですが 秘密というのは、必ずどこから漏れるものですよ」

「…目立たないように行動してたつもりだったのにな」

「無理ですよ。貴方は人目を引きますから」

そう言つて、イチノセはジャケットの内ポケットから小型拳銃を取り出した。景助も小さなため息とともに、コートの袖に忍ばせていたナイフを手にした。

「日本でガンファイトはまずい。できるだけ銃は使つな」

「相手しだいです」

景助とイチノセが目配せすると、複数の足音が近づいてきた。おおよその計算では5人程度か。人通りの少ない道に入ったところを突かれた。恐らく、大学にいた頃から目をつけられていたのだらう。銃を構えたいかにも怪しげな男たちに囲まれると、景助は問うた。

「何が目的だ？ …いや、誰の指示だつて言うべきかな」
「教えてやる義理はない」

どうやら穩便に話し合いをする気はさらさらなさそうな相手方は、銃のセーフティレバーに指をかけた。

その一瞬の隙を突いて、景助とイチノセは相手の懷に飛び込んだ。銃を蹴り飛ばし、肘鉄を喰らわせ、氣絶させる。残りが動く前に、次の動作に移る。

相手の実力としてはたいしたことはなく、あと2人、となつたところで、思わぬアクシデントが起きた。

「おい、景助ー？ お、んなとこにいた… って何やってんだ！？」

景助を捜しに來た優也が、角を曲がつて現れたのだ。見知らぬ男たちと、派手なアクションシーンを繰り広げているさまに、啞然としている。

僅かでもそちらに氣を取られたのがまずかった。男たちの動きが一步早く、優也の方へ走り出した。

「優也っ！ 逃げる！」

景助が叫んだが、優也は事態が飲み込めない様子で、動けない。ここで優也を人質に取られると、身動きが全く取れなくなってしまう。

景助は男の足もとを狙つて、ためらいもなく引き金を引いた。彼らが呻き声を上げてその場に崩れると、すぐに優也のもとへ駆け寄った。

「大丈夫か？」

景助が尋ねる後ろで、イチノセは倒れている男たちの胸ぐらを掴んでいる。

「あ、ああ。大丈夫だけど…」

優也がそう答えると、景助はほっと息を吐いて、イチノセの方を振り向いた。

足をおさえてうずくまっている男たちを見下ろし、景助は静かに言う。

「あんたら、誰に頼まれたんだ？ 答えるなら逃がしてやってもいいけど」

男たちは沈黙を保ったままである。イチノセが襟首を掴んで締め上げるのを、景助は肩に手を置いて止めさせた。

「そんなぬるいやり方じゃ、こいつらは吐きそうにないな」

「…どうしますか。こいつら自体はたいしたことはありませんが、銃を携帯しているのが気がかりです」

「ろくでもない連中が銃を持ってるのは、アメリカも日本も同じだろ」

言い放った景助は、ナイフを片手に、一人の男の前に屈み込んだ。そして首筋にナイフを突きつけ、

「こう見えて、俺は医者なんだ。だから、人間の血管、神経がどこを通ってるかは、手に取るように分かる。…つまり、神経を一本切断して、あんたの全身の自由を奪うのも俺には簡単だったこと。ただし、一生修復がきかないくらいにね」

男がまだ動かせる上半身を使って、景助のナイフを奪おうと掴みかかってきたが、景助は後ろに跳んでひらりとかわし、男の肩を蹴って道路に倒し、素早く首の真横にナイフを突き立てた。男の首の皮一枚が切れて、血が伝う。

「あと3センチ右に刺さってたら、あんた死んでるよ。俺もいつまでもあんたたちと遊んでられるほど暇じゃないんだ。用事はさっさと済ませたい。これ以上時間を取らせるなら、全員ここで処分するしかない」

景助が待機していたイチノセに顎で指示を出すと、男は観念したのか口を開いた。

「俺たちは、西峰会の人間だ！ あんたが何者かも聞かされてねえよ。ただ幹部連中に頼まれたんだ」

「セイホウ会：分からないな」

「俺たちが言えるのは、本当にこれだけだ。幹部なら何か知ってるかもしれないけどな」

景助が腕を組んで考えていると、イチノセが、

「彼らを帰すんですか」

「ああ。ここに置いていても面倒だ。おい、あんたら。帰ったらボスに伝えとけ。『悪いがあんたらの相手をしてる暇はない』ってな」

きつと、日本に来たのは間違いだった。仕事を片づけて、早々に帰国するべきだろう、と景助は不安そうにこちらを窺っている優也を見て、強く思った。

第四章

優也は自分の前に現れたのが、本当に橘景助なのか信じられなくなっていた。

知らない男たちをものともせず薙ぎ倒し、表情ひとつ変えず銃口を向ける姿に、かつての景助の面影はなかった。日本人学校で優也とともに過ごしていた頃も、喧嘩が強かった覚えはあるにしても、自ら進んで他人を傷つけるようなことはしなかった。どちらかと言えば、大人しくて優しい性格をしていた。それなのに。

7年間で、人はこうも変わるものだろうか。優也の中で、疑問が渦を巻いていた。

結局昨日の夜、景助とイチノセは桐島家に帰っては来たが、用意した客間で一睡もしなかったようだった。争っていた連中が何者なのかは分からずじまいだったけれど、景助が今、身を危険に晒される立場にいることはよく理解できた。

朝食も摂らずに、早々と家を出ていった景助と、実際ほとんど話しができていなかった優也は、その日も城北医科大学の研究室を訪れた。昨日の今日で、景助とは顔を合わせづらい雰囲気になってしまったのだけだ。

重い足取りでたどり着いた研究室の扉の前には、イチノセが腕組みをして立っていた。

「…こんにちは」

気まずいながらも、優也は挨拶をした。

「Mr・橘に会いに来られたんですか」

「そうっすけど」

「今は会ってくれませんか。研究に集中できないからと、私も追いつけませんでした」

クールな態度は崩さず、イチノセが言った。

「そっか。いつぐらいに終わんのかなあ……」

優也は呟いて、時計を見た。午前11時すぎ。昼には外に出てくるだろうか、優也はイチノセの隣の壁にもたれて、座り込んだ。

「イチノセさんは、いつから景助のボディガードやってんですか」

ふと、優也は尋ねてみる。

「なぜそんなことを？」

「なんか……景助すごい変わったからさ。俺の知らない間に何かあったのかなって」

「私が彼を知ったのは、5年前です。セキュリティとしてはなく、たまたま用事があったで行ったコロンビア大学で、私の親戚を通じて話をしたんです。今回私が彼のセキュリティを務めることになったのは、本当に偶然です」

「イチノセさんと会った時、景助はもう今みたいな感じだったのか？」

優也の質問に、イチノセはかぶりを振った。

「今も昔も、彼は変わっていませんよ。少し、人に対して警戒心を抱くようになっただけです。……昨日のようなことが、繰り返し起こっていたら、ごく当然です」

「なあ、何で景助は狙われてんだ？ やばいことでもやってんのか？ 昨日みたいなこと…普通じゃないだろ」

優也が立ち上がって詰め寄ると、イチノセは口を噤んでしまった。

「教えてくれよ！ 何で景助が狙われなくちゃなんねえんだ」

優也が声を荒げると、

「さつきから、何を騒いでる」

不意に研究室のドアが開いて、白衣を着た景助が現れた。明らかに不機嫌そうな顔をしている。

「すみません。ただ私は職務上、ここで黙って立っていただけなんです」

「あ、ひど。全部俺が悪いみてえじゃんか」

優也が口を尖らせると、イチノセは素知らぬ顔で景助に視線を移している。景助とは目が合わせづらかったが、優也は思い切って話を切り出した。

「あのさ、景助」

「何だ？」

「俺やつぱ昨日の夜のこと、気になってさ。景助は知られたくないことかもしれないけど、それじゃ俺が気持ち悪いまんまだし。…何よりお前に隠しごとされてんのが、俺は嫌だ」

きつぱりそう告げると、景助はいったん目を伏せて、次にイチノ

セを見た。

「優也に何か話したか？」

「特には。…彼には貴方から話すべきでしょう」

諭すようなイチノセの言葉に、景助は小さく「そうだな」と呟いた。そして優也に、

「…煙草、吸いにいくついでになるけど、いいか」

と、尋ねた色素の薄い景助の瞳の中に、それでも自分には打ち明けてくれない事実があるだろうことを、優也は何となく感じていた。

「俺は2年前から米軍の研究所でウイルス研究に協力してるんだ。米軍の派遣先は途上国も多いし、あらゆる伝染病に対応しておく必要があるからな」

景助は研究棟の裏の屋外喫煙所のベンチに座って、煙草の煙を燻らせながら話し始めた。優也は横に立ったまま、じっと聞くことにした。

「まあ、俺が担当してた分野は伝染病対策というよりは、ウイルスの致死率を上昇させたり　いわゆる生物兵器の開発ってやつで。最悪のケースでは小国の人口が殲滅する感染力と毒性を持つウイルスも開発した」

「それって…やばいじゃん」

「やばいなんてもんじゃない。嚴重にP4レベルで管理しないと、米軍自体が一週間もしないうちに機能しなくなる。俺がやって

るやばいことが何なのか、分かってもらえた？ ついでにこのウィルスのワクチン開発にも携わったけど、これが企業での活動だったら何千万ドルって大金が動く。だからそのデータ欲しさに企業のスパイとかマフィアがつきまとうてくるんだ」

優也が言葉を失って冷や汗を流している間に、景助は二本目の煙草に火を点けた。

「黙ってて悪かった。俺に拘わりすぎると、お前まで巻き込まれると思ったんだ。…多分、もう遅いけど。だから俺が帰国するまでは、あんま一人で行動するなよ」

「帰国って…お前いつ帰るんだよ？」

「1ヶ月後」

「すぐじゃねえか！ もつと長いこといられないのか」

「俺は一応まだ博士課程在籍の身分だからな。アメリカでの研究もほったらかしにできないんだよ」

景助は何か困ったような顔をして口もとに笑みの形をつくった。

景助は、嘘をついている時、こういう顔をする。

気づいたら優也は怒鳴っていた。

「…お前さ、何隠してんだよ。水臭えんだよ、さつきからさあ！

俺たちダチだろ？ 拘わりすぎるなとか、何で今更遠ざけようとするんだよ？」

「優也？」

「お前が嘘ついてんのだって俺には分かったよ。そりゃお前にだって言いたくないことはあるだろうけどさ、今はほんとのことを言うべきところじゃねえの？ お前、アメリカで何やってたんだよ？ 何で軍に協力なんかしてんだよ？ 1ヶ月で帰らなきゃなんないのだって、他に理由があんだろ？ 俺は聞きたいことだらけなんだ！」

言いたいことを吐き出した優也は、すっきりして景助をまっすぐ見詰めて、また疑問を抱えることになった。動揺なり困惑なりしていると思っ た景助の表情が、泣きそうに悲しみに満ちていたからだ。何が悲しいのかが、分らない。

（俺そんなにまずいこと言ったか　？）

かえって困惑させられた優也は、それをごまかすように息をついて景助の隣にどかりと腰を下ろした。

「別にお前を責めるつもりはねえよ。お前にだって色々事情はあるだろうからさ」

「…悪い。けど今は言えないんだ。いつか必ず話すから。待っててくれるか」

景助がこちらを向いて、今度は嘘のない目で言った。

「いいよ。俺らダチじゃん」

優也が笑って答えると、景助は嬉しそうに微笑んだ。彼のこんな顔を見るのは、随分久しぶりだった。衝動的に優也が抱きつくと、景助は声を上げて笑った。自分が景助にとって、すべてを打ち明けられる存在でなくなったことは、言いようもなく淋しい。ただ、昔のように笑い合えるだけで、優也は満足だった。それ以上を望もうとは思わなかった。

そんな時間でさえ、長くは続かないような気がしていたから。

第五章

7年前。

景助と優也は、アメリカ東海岸の日本人学校に通っていた。もちろん地元の中学校にも通っていたが、土曜日は週に一度、周辺の都市からも日本人の生徒が集まり、日本語での授業が行われる。

その中でも、やはり二人は行動を共にしていた。景助はかなり人見知りをする方だったし、優也も景助と一緒にいる時が純粋に一番楽しかったのだ。

「なあ景助。この後どうする？ 俺ん家来るか？ 昨日新しいゲーム買ってさ」

家が日本人学校に近いので、二人は徒歩での通学が専らだった。その日も授業後、15分程度の道のりを並んで歩いていた。

「また？ お前の部屋、そろそろゲームソフトで埋まるんじゃないか」

「いやあ、まだまだだな。つか最近妹が邪魔してきて、全然はかどんねえの」

「可愛いもんだろ。これから会いに行こうかな」

「あいつマジで喜ぶぞ。いや、それはお袋か？ お前、熟女キラーってやつだな」

「…嬉しくないな」

他愛もない会話を繰り返しながら、優也の家まで残りおよそ百メートル、というブロックに差しかった。

と、角を曲がってきた二人組の男とぶつかった。相手が体格のよい黒人だったため、景助と優也が弾き飛ばされるような形になった。

『…挨拶、させてもらおうかな』

言いながら、景助は自分の胸倉を掴む男の腕をゆっくりと外していった。相当強い力が加えられているのか、男は顔を顰めつつ、驚きを隠せないようだった。

景助は本気だ。優也がそう思った時には、既に男は景助に背負い投げされて地面に叩きつけられていた。

優也は忘れていた。二年前、景助が柔道の全米ジュニアの大会で準優勝したことを。彼は立派な有段者で、その実力は柔道初心者の優也にも見て取れた。さらにどういう教育の一貫なのか知らないが、景助は父親に武術を色々と叩き込まれているらしく、たまに喧嘩をしても景助が本気を出すと、優也は勝てたためしなかった。

（そうだ、あいつ強いんだった…）

そうと分かれば、優也は頬をさすりながら高見の見物を決め込んだ。

あの細い身体はどこにそんな力が宿っているのか、景助の技はかなりの破壊力をもって男たちを圧倒していた。最後に決まったのは、綺麗な回し蹴りだった。

「お見事」

優也が拍手を贈ると、襟を正した景助が息ひとつ乱さずに「気楽でいいな」と呆れたように言った。そして足もとでうずくまっている男に目もくれず、さっさと帰ろうと優也を促した。まるで、何事もなかったように。

再び並んで歩きながら、優也は言う。

「お前って、クールに見えて意外と喧嘩っ早いよな」

「そうか？」

「そりゃ俺と喧嘩する時は、俺のが手出すの早いかもしれんねえけど」
「うん」

「今のところ俺の連敗だぞ。お前、また強くなってるねえ？」

「そうかな。やっぱりウエイト差があると結構きつい」

「そういう問題か……？」

「俺があと10キロ重かったら、さっきの奴らももっと簡単に」
「それも怖いから考えたくねえなあ」

優也が身震いすると、景助は「冗談だよ」と笑った。

その後、優也の母親に思いきり心配されてお叱りを受けたのはいうまでもない。

（昔からあいつは強かったんだよなあ……けど『この前』は。強いっていつか）

アメリカにいた頃を思い出しながら、優也は考え込んでいた。景助と再会したその日の夜、セイホウ会だとか名乗った連中と争っていた景助は、殺気さえ帯びて、確実に相手を仕留めるような動きだったように思う。あくまで優也の勘にすぎないが。

何が景助をそうさせるのか。

「何があったんだ？」

俯いて小さく呟いた優也の隣に、滑り込むように座ってくる影があった。当の景助だ。

「今日も来てたのか」

白衣姿の景助は、研究室を抜けてきたところなのだろう、ほのかに薬品の香りが漂っている。

真実をいずれ話す、と約束してから5日。暇さえあれば大学を訪れている優也は、ほぼ毎日景助と顔を合わせていた。

「研究、進んでるのか」

「ぼちぼちかな。岩崎先生だって数年がかりで続けてきてる研究だから、そう順調に、とはいかない」

肩を竦めた景助は、馴れた仕草で煙草を銜える。

「お前、煙草吸いすぎじゃねえの」

優也が嗜める。

「ああ、煙かったか？ 今度からは離れた場所で吸うよ」

「そうじゃなくて」

「…いいんだよ。健康を気遣うとか、そういうことはやめたんだ」

あまりにきつぱりと景助が言うものだから、優也はそれ以上咎める気になれなかった。景助は煙を吐きながらどこか遠い目をしている。優也が隣にいるのに、それも気にせず一人の世界に入り込むのも、彼には昔からよくあることだった。

「橘君、やっぱりここにいたのね」

二人で無言のまま座っていると、背後から聞き覚えのある女の声がした。

「岩崎先生が探してたわ」

岩崎教授のゼミの助手、永瀬晶だった。ここ最近は頻繁に研究室に出入りしていた優也も、幾度か言葉を交わしたことがある。長身でなかなかの美女であり、研究室のマドンナと呼ばれているとかいないとか。何にせよ、女性の少ない医学系のゼミでは男性陣の目の保養の対象であることは違いないだろう。

「わざわざご苦労様です」

景助はゆっくりと立ち上がった。

「あら、桐島君も一緒なの？ そういえば、お友達なんだっけ？」

「ええ。それで、岩崎教授は何て？」

「貴方、教授が頼んだウイルスの遺伝子解析を途中で放り出してきてたでしょ？ すいぶんご立腹だったわよ」

「それならもう終わって、データをまとめておきましたけど」

「…うそ。だってまだ いや、貴方なら可能だったわね。ウイルス学で世界トップクラスの論文を発表した人だもの」

「たまたまですよ」

そんな会話を黙って眺めていた優也は、

（こういうのを、美男美女っていうんだろうな…）

なんて、アカデミックな会話の内容とは裏腹に、まったくどうでもいいことをぼんやりと考えた。

「今度ゆっくり橘君の話を聞きたいわ」

「近いうちにゼミのメンバーで食事でもしましょうか」

「二人でいいじゃない。あの人たちと飲むと、研究の話ばっかになっちゃうもの」

「俺と二人で飲んでも、じゅうぶん退屈だと思いますよ」

「そんなことないわ。約束よ」

話が段々とおかしな方向へ流れていた。永瀬が優也の存在をよそ目に景助を口説きにかかっている。

（さすがマドンナ…手が早いぜ）

こうなってくると、優也の立場はかなりアウェイだ。永瀬が目線で、さつさと二人きりにさせろ、と訴えてきているような気がしてならない。

「あのー俺そろそろ帰るんで…」

優也がこそそと立ち去ろうとすると、後ろからがっしりと服を掴まれ、引き止められた。

「待て。まだ用事がある」

景助が慥然とした顔で言う。察するに、彼は彼で二人きりにしてくれるな、ということであろう。この流れでは景助がマドンナの餌食になるのもそう遠い話ではなさそうなので、必死の回避作戦に強制的に協力させられてしまった。

「用事って言っても、もう休憩時間は終わりにした方がいいんじゃない？ 貴方、ただでさえ今日は昼前に出勤したばかりなんだから、少しは研究室にこもって岩崎先生を手伝ったらどうなの？」

マドンナの手厳しい言葉にも、景助は笑顔で受け応える。

「すぐ戻りますよ。お待たせしても悪いですから、永瀬さんは先に
行ってください」

「何か聞かれちゃまずい話でもあるわけ？」

疑り深い目で尋ねるマドンナに、

「実はそうなんです」

と、あっさり景助が言うものだから、さすがの彼女も面食らって、
不服そうに研究棟の方へ歩いていった。

彼女の後ろ姿を見送りながら、優也は肩をなで下ろした。

「やるなーマドンナ。景助、お前狙われてんぞ」

「…そう思うか？」

「いや、見りゃ一発で分かるだろ。モテる男もつらいな」

「別にモテてないよ」

またそんな謙遜を、と優也は突っ込もうとしたが、新しい煙草を
銜えた景助があまりに冷めきった表情をしていたので、

（きつとこいつは、好きな子にはなかなか振り向いてもらえないタ
イプなんだな　　）

優也は好き勝手に考えを巡らせる。けれど、言われてみれば、景助
には彼女がいないのか？　今まで色々と話すことはあったが、恋人
の話に至ったことはなかった。

「そついや、お前彼女は？ 永瀬さんの誘いだって、彼女理由にして断ればいいじゃねえか」

優也が軽い調子で聞くと、景助はしばらく沈黙した後、やや低く答えた。

「…いたよ、昔は。今は、いない」

「そつか。で、どんな子だった？ むこうの子か？」

「日本人だよ。大学で知り合った」

「ふーん。会って見たかったな。お前が選ぶくらいだから、可愛いんだろな」

冷やかし半分で景助を見ると、彼は俯いて紫煙をゆっくりと吐きながら言った。

「そつだな。…俺には勿体なかったよ」

自分で聞いておいて、優也は思わず固まった。景助がこんなあからさまにのろけるのを初めて耳にしたからだ。

そして、彼が一瞬こちらが照れてしまいそうになるくらい、幸せそうに微笑んだので、きつとまだ、彼女のことを想っているんだろことが優也には分かった。そう思ったら、はぐらかすようにさつさと歩いてしまった景助に、これ以上何も聞けなかった。

第六章

初めて出会った時、景助は17歳、イチノセは25歳だった。

コロナビ大学の教授であつた伯父を訪ねると、彼の研究室に景助がいたのだ。景助は伯父のゼミ生というわけではなかったが、演習で受け持ってから、優秀な景助を伯父はいたく気に入っているようだった。

物心つく以前から伯父にはよくしてもらつていたイチノセは、頻繁に自宅からも近いコロナビ大学へ足を運んでいた。時間がある時には講義にもぐり込んで大学時代を懐かしんだりもした。

その日の講義は医学部のやたらと専門的なもので、マイクを通して聞こえる難解な用語の羅列にイチノセは頭が痛くなつてきた。真剣に講義を聞く気がないにしろ、ここまで意味不明だと正直げになりする。

入る教室を間違えたな、とイチノセが退室しようとする、出入り口に一番近い席に景助が座っているのに気づいた。伯父が絶賛するほど優秀な学生の彼は、てつきり最前列で教授の講義に耳を傾けるものかと思つていたが、どうも彼は講義開始ぎりぎりか、あるいは遅刻して入室したらしく、講義の受け方もけして真面目とは言い難かつた。

適当に広げたテキストに、ちらほらとメモ書きがある程度のルーズリーフ。しかもその顔はひどく退屈そうだ。

今まで特別言葉を交わしたことがあるわけでもないのに、イチノセは景助の横に立つて「Hi」と声をかけていた。景助は一瞬怪訝そうな顔をして、思い出したように「ああ」と呟いた。

「こんなところで何やってるんですか」

景助は自然に話しかけてきた。そして、こちらを窺っている教授の目を気にしてか、席をひとつ移動してイチノセの分を空けてくれた。帰るつもりだった講義に再び居座ることになったイチノセだが、伯父が目にかけるこの少年と一度話がしてみたかったので、声をひそめて言った。

「医学部の授業は、いつもこんな意味の分からない単語が飛び交ってるのか？」

「…そうでもないですよ。この教授の授業がややこしいだけ」

景助は欠伸を噛み殺すように、下を向く。

「君は何で医学部に？」

ほぼ初対面と言ってもいい相手に不躰だが、イチノセは素朴な疑問をぶつけた。

「…何でそんなことが知りたいんですか」

「いや、ただ何となくだな。答えがなくなったら、答えなくて構わないよ」

「あんた…よく分からない人だな」

景助は微かに苦笑して、右腕の時計を見た。

「…最後までこの授業受けるつもりですか？」

「え、いや。あまりに理解できないから、途中で抜けようと思ってたところなんだが」

イチノセが頭を掻くと、景助はふっと笑った。

「偶然。俺もなんです」

それ以後、イチノセは時間が取れば景助と頻繁に会うようになり、同じ東洋人同士という親近感も手伝ってか、本人たちの予想外にも親しい間柄になった。聡明な景助は口数は少ないにしても、話していてイチノセを退屈させることはなかったし、時々覗かせる年相応の少年の顔は微笑ましかった。

年は離れていたが、親友と呼べる仲だった、と思う。信頼に足る相手だということは、今でもイチノセの中では変わらない。

腕を組んで俯いていたイチノセの前で、おもむろに研究室のドアが開いた。そこに立ちはだかるイチノセの顔を見るなり、景助は眉間にしわを寄せた。

「そうあからさまに嫌そうな顔をされると、さすがに傷つくんですが」

イチノセが言うと、景助は無言のまま歩き出した。イチノセはその斜め後ろに付いていく。

「…べつにあんたは俺のセキュリティじゃないんだから、べつたりくつついて歩く必要はないし、第一あんなドアの目の前に立たれたんじゃ威圧感もいいところだ。研究室のメンバーが怖がるからやめてくれ」

「それでは私が職務怠慢だと叱られます。今度からは目立たないように善処します」

「是非そうしてくれ」

「貴方もずいぶん可愛げがなくなりましたよね」

「お互いさまだろ」

景助は大学ではほとんど研究室とこの屋外喫煙所しか利用していない。人目につくのを嫌っているのもあるし、元から行動範囲の広い男ではなかった。

ベンチに腰を下ろして煙草を銜えた景助に、イチノセは言う。

「既に情報は掴んでいるんでしょう？」

ライターの火を点ける手をいったん止めて、景助は、

「この研究室には何もない」

「何だって？」

「ここにはそれらしきデータは存在しない。教授が続けている研究だって、当時の研究の延長線上のもので、おかしい点も見当たらないしな」

「教授からは詳細を聞き出せそうですか」

「無理だ。できるならとづくにやってるよ。米軍に関与してた時点で、俺はかなり警戒されてる」

景助は煙草に火も点けないままで、腕組みをして俯いている。普段考えごとをする時には煙草をくわえる彼だが、もの凄いスピードで真剣に考えを巡らせている場合には、煙草はおろか完全に外界を遮断することをイチノセは知っている。

景助が煙草に火を点けるまで、周囲に気を配りながらイチノセは待った。

「イチノセ」

不意に景助に名前を呼ばれた。

「何ですか？」

「俺たちは岩崎教授が米軍管理下で行っていた研究データが欲しいんだよな」

「正確には、その時紛失した、一部のデータです。岩崎教授が何らかの情報握っているのではないかと。現在教授が続けている研究とは異なるものだと思いますが」

「…何で連中はその『一部』にここまで必死になるんだろうな。岩崎教授がデータを持ち出した確証もないのに」

ふつと煙を吐き出した景助が、独り言のように呟く。

「わざわざ処分が決まっていた俺みたいなのを使つてまで探らせてるのは普通じゃない。米軍が日本政府の協力も得ずに、だぞ。米軍が動いてるってことを知られたくなんだろうか」

「この任務は米軍内でも極秘中の極秘事項です。よほど外部に漏れるとまずい事情でもあるんでしょうね」

「しかもだ、どうあつても俺にその消えたデータの内容を教えようとしてない。その研究に関連したものだつてなら、わざわざ隠す意味はないだろうが…」

「あなたにも見当がつかないんですか？」

「研究自体は、十年前アフリカで発見されたきわめて毒性の低いウイルスを扱っているんだが…ただこれが最近になって、変異して猛毒のウイルスにもなることが分かったんだ。一年ほつたらかしにしておいて、そこに食いついたとなると、連中のデータの利用目的はまっとうじゃないかもしれない」

「というところ？」

「たとえば生物兵器として使うとかさ。一年前ならその程度まで研究が進んでいてもおかしくはない。だとしたら俺は一切手を出さない。そんなデータ、永遠に見つからなければいい」

はつきりと意思を持った目で景助が言う。景助はイチノセを見上げて、小さく口の端を上げて笑った。

「そう言ったらお前は どうする？」

「その時は、しかるべき手段を講じるまでです。貴方もそれくらいのことは想定しているんでしょう？」

「…そうだな。残念ながら、俺もデータ内容が何であれ、やらなきゃいけないことがある。ついでに任務を遂行してやるよ」

そう言つて景助は立ち上がり、イチノセが言葉をかける前に、さつさと研究棟の方へ歩いていってしまった。

景助が何を考えているのかは、イチノセには分からない。ここ数年で、景助は極端に周囲を遠ざけるようになった。親しい間柄の人間ほど、その関係をことごとく断ち切っていくようだ。まるで、自ら孤独であることを望むかのように。

イチノセもまた彼が断ち切ろうとした人間の一人だろう。それでもイチノセはこうして彼の近くで、多くを目にしてきた。だからこそ、彼の目が時々イチノセを震撼させるほどの憎しみをはらんでいることが、不安でたまらなかった。あの目ははたして誰に向けられたものなのか。

（景助の復讐は、まだ終わっていないのか　？）

景助がこのまま大人しく米軍に従っているとは到底思えない。彼がやらなければならないこと、というのも引つかかる。

「…よくないことが起こりそうだ」

そうこぼして、イチノセは景助の後を追った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7138d/>

Ever Lasting

2010年10月18日14時27分発行